

文献研究における時空間情報の構造についての考察

—東洋古典籍研究の視点から『日本書紀』を事例として—

當山日出夫[†] 高田智和^{††}

[†]花園大学(非常勤講師) hotym@kcn.ne.jp

立命館大学グローバル COE「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」客員研究員

^{††} 国立国語研究所 ttakada@kokken.go.jp

キーワード：日本語史 訓点資料 日本書紀 時空間情報

本発表では、訓点資料のデジタル化の課題について述べる。日本語の歴史研究の重要な資料として訓点資料と称される一群の文献がある。古代において漢文を訓読した際に記入された仮名などである。しかし、この種の資料について一般にはあまり知られていない。また、訓点資料は、日本語研究の資料であると同時に、仏教学文献であり、歴史学の史料でもある。つまり、資料として多様な性格を持っている。本発表では、まず、訓点資料の特質を説明する。そのうえで、日本語研究の視点からみた、文献の属性(時空間情報)について考察を加える。文献資料の時空間情報は一義的客観的に決定されるものではなく、研究目的によって異なるものである。多様な研究目的に対応可能な資料検索システムの必要性を提言する。具体的事例としては『日本書紀』をあつかう。

The Research about the Philology and the Space-Time Information

TOUYAMA Hideo[†] TAKADA Tomokazu^{††}

[†] Hanazono-University

Ritsumeikan-University(G-COE:Digital-Humanities)

^{††} The National Institute for Japanese Language

In the research of a Japanese history, KUNTEN-SIRYOU is important. However, KUNTEN-SIRYOU is not known in general. KUNTEN-SIRYOU is a character that fills in the word when the Chinese writing is read in Japanese on the text. KUNTEN-SIRYOU is a document of the Buddhism, and the historical materials of the history of Japan. Therefore, this composes information on various, complex time and spaces. The analysis is necessary to share the research material. This research reports the feature of KUNTEN-SIRYOU.

01. はじめに

日本語研究の分野では、訓点資料が重要な一群をしめている。しかし、この資料群は、一般にはほとんど知られていない。訓点資料とは、古典漢文に日本語の読みを記入したもので、その現物が現存している。そのため、その本文書写年次や訓点の加点・移点時が重要な、時間情報となる。一方、訓点資料の多くは、同時に漢訳仏典であったり、歴史史料であったりもする。したがって、訓点資料のデジタル化、および、利用・検索のためのメタデータは、時空間情報がきわめて錯綜したものとなる。本稿では、日本語研究の視点に立脚して、訓点資料の時空間構造の分析をこころみる。

02. 学術資料の共有の課題ーメタデータ・時空間情報・GISー

現在、各研究分野における学術情報資源の共有・流通が重要な案件のひとつになっている。単に資料をデジタル・アーカイブしておくだけでは、その分野の専門家だけ(場合によっては、その作成にたずさわった研究機関や研究者だけ)のものにとどまってしまう危惧がある。それを、より多くの研究機関・研究者が共同で活用しようという動向である。そのために、横断的な検索メタデータとして、従来の「キーワード」を主体としたものから、「時空間情報」を利用しようとする方向にある。

「キーワード」主体の検索では、研究目的・資料の性格・研究領域での慣習・研究者個人の考え、などによって、さまざまなばらつきが生じる。しかし、「時空間情報」は、そのような人為的・恣意的な要因(主観的価値判断)がはいりこむ余地のない無機質で機械的・一義的なものである(と、一般に考えられている……実は、このところにある種の陥穽がある。本稿においては、ここを問題としたい)。

一方、最近では、「地理空間情報」にさらに「時間情報」を加えて、「時空間情報」として総合的あつかう技術が急速に発展してきている。いわゆる「GIS」である。

その結果、資料に対するメタデータとしてGISを利用してはどうかという試みがなされ、本シンポジウムのテーマである「人文学とコンピュータ」の領域における、最先端の研究課題のひとつになっている。以下、本稿では、GISの用語は、(その本来の意味を離れたものとして)、学術情報資源共有のメタデータの一種を意味するものとして、使用する。

なお、GIS=メタデータ、とすることには、本来のGIS研究者、および、情報学研究者からは、異存のあることであろう。しかし、本来の専門的に厳しく定義された用語が、独立して一般的に利用されるようになることは自体は、学術的に不正確という意味でのマイナス面ばかりではない。たとえば、「ユニバーサルデザイン」「アイデンティティ」などの用語も、もともとは、厳格な定義のもとに使用される用語であったが、今は、一般に普及したことばとなっている。そして、これらのことばは、新しい概念で世界を見ることを可能にした。GISも、研究資料の時空間情報・メタデータというあらたな研究の視点を、人文学研究の世界に提供してくれるものと期待して、あえてこのことばを使用する。

03. 訓点資料

その専門分野では常識的になっている用語・概念・分類であっても、他の分野や一般からみれば、まったく通じない、ということがあり得る。筆者(當山・高田)が本来の専門領域としていているところの、日本語の歴史的研究分野における訓点語学(訓点資料)が、まさにそれに該当するであろう。

以下、贅言をついやすことになることを承知のうえで、訓点資料やその日本語史研究資料としての価値や特性について、説明することとしたい。(ただ、そもそもの日本における訓点資料の成立のプロセスについては、いまだ十分に解明されているとはい言い難い。あくまでも、現在の研究段階において、筆者の判断するところで、訓点資料研究者に一般的に理解されるであろう範囲で記述する。)

まず、古代の日本語は無文字言語(その言語の書記のための固有の文字をもたない)であった。一方、中国においては、今から約 3000 年ほど以前に、文字(甲骨文字)が使用され、その後、現在にいたるまで、中国を中心とした東アジア漢字文化圏を形成するにいたっている。日本においては、紀元後数世紀のうちに漢字が伝来しており、7~8 世紀以降になって、漢字をもちいて日本語を書くことが行われるようになる(いわゆる「万葉仮名」などである)。

中国で、随・唐の統一王朝が形成され、それにともない、日本も古代国家としての体制をととのえることになる。その結果、中国から、大量の漢文の文献が日本にもたらされることになった。漢文の文献(漢籍・漢訳仏典)を、日本語においてどのように受容したか、日本語で読んだかを、しめすものが訓点資料と称される一群の文献群である。

無文字言語であった日本語では、当然ながら書記言語は発達していなかった。つまり、翻訳ということが不可能であった。そのため、漢文については、その本文(原漢文)をそのまま保持しながら、漢文の句読をきる、日本語としての読み方をしめす、漢字の発音をしめす、意味の注釈を記入する、などのことを行った。これらの記入を総称して、訓点という。ここから、現在の日本語で使用される、仮名文字(特にカタカナ)の成立を見ることになる。あるいは、仮名ではなく、ヲコト点と称される記号を本文の漢字に記入する。このヲコト点には、各種の種類がある。

オリジナルの漢文を保持したまま、訓点を記入するという方式は、現在にいたるまで、漢文のよみかた(訓読)として、学校教科書の古典の漢文教材や、日本史における漢文表記史料の解説にうけつがえられている。(注1)

04. 日本語研究における訓点資料の価値

訓点資料は、日本語の歴史研究では、きわめて重要な役割をになっている。日本語史の研究では、概ね室町時代あたりで、古代語と近代語をわける(この場合、近代語は明治以降のことではないので注意されたい)。その古代語(室町期以前の日本語)の研究において、訓点資料は、最重要な資料価値をもつ。そして、このことは、意外と一般に知られていない。

訓点資料の価値について、ここでは、次の三点をあげる。

- (1) 実物が現存することである。例えば、平安時代の文学作品の代表として『源氏物語』や『古今和歌集』などが一般に思い浮かぶところである。しかし、これらのオリジナルの写本を見ることは、不可能である。現在に残っているテキストは、主に鎌倉時代以降、特に藤原定家の書写校訂を経た本によっている。つまり、後世の写本しかない。しかし、訓点資料は、その実物、つまり、古くは奈良時代から平安・鎌倉時代にかけて、同時代に訓読・加点了された、そのままが現存している。
- (2) 口頭言語を反映したものであること。訓点の記入(加点了)は、漢籍・経典の講義録のようなものであったと考えられている。また、漢文(外国語)を読むためのものである。したがって、そこに記されたことばは、当時の口頭言語をかなり忠実に反映したものである。例えば、当時の漢字の発音を、日本語の仮名(片仮名)で、どのように表記したか、などである。そのため、日本語の音韻史の研究資料としてきわめて貴重である。
- (3) 一般に知られている古代語文献(『源氏物語』など)とは、言語の位相を異にすることがある。古代から中世にかけて、日本における識字層は限られたものであったであろう。その限られた識字層の内部においても、和文・和歌などでの文学における使用言語と、漢文訓読など学問の場面での使用言語には違いがあったことが判明している。

以上を総合するならば、訓点資料というのは、古代語(室町期以前)における、文法・音韻・語彙など

の歴史的研究において必須の資料群である、ということになる。このような訓点資料を専門に研究する学会として、訓点語学会(1953年設立)があり、今にいたるまで、機関誌『訓点語と訓点資料』(現在の最新号は、第119輯、2007年9月)を刊行し続けている。会員数、約400名あまり。(注2)

しかし、これらの資料群の学術的価値が一般には知られていない理由は、主に次の二点である。

- (1).漢文訓読という資料の特殊性のゆえであろうか、一般の古語辞典や国語辞典には、ことばの用例として採録されることが少ない。したがって、ことばの実例として、一般の目に触れることがない。
- (2).一般向けに書かれた日本語史の通史そのものが稀であり、そのため、資料の存在や研究について知られないままである。訓点資料をあつかった研究書は数多くある。しかし、それらは、その分野の研究者のために書かれた専門学術書である。このことは、日本語研究全般にわたる問題でもあるが、特に、訓点資料の一般的な認識においては、大きく影響する。(注3)

また、さらに、次のような事情もある。

- (3).訓点資料が、博物館・美術館などで展示される場合、基本的に、古典籍・古写本、としてあつかわれる。訓点の記入があっても、解説などでそのことに言及すること自体が稀である。

05. 訓点資料は訓点資料として存在しない

以上、訓点資料の存在とその研究資料としての価値について言及してきた。しかし、視点を変えて見ると、実は、訓点資料は、訓点資料として存在するものではないとも言える。

日本語の歴史の研究者が、訓点資料をとありあつかうとき、それは、他の研究分野の資料を見ていることと重なる。一般的に考えて、言語の歴史を文献的にたどるとき、その言語史研究のために残された資料というのは、基本的に存在しない。古文書であつたり、文学作品であつたり、宗教書であつたり、歴史書であつたり、種々の目的で、昔のことばで記された文献資料を対象として、ことばの歴史を探っているのである。

ここで訓点資料としている資料群も、たまたま訓点の記入がなされているが故に、日本語の歴史研究者が着目し、資料価値を見いだしたものである。現在、訓点資料として研究対象となっているものには、次のようなものがある。

- (1).漢訳仏典
- (2).漢籍・経書
- (3).古辞書(=漢文を読み書きするための辞書の類)
- (4).その他、抄物、古記録など

これらのうち、(1)(2)の漢訳仏典・漢籍・経書の古写本類が、文献の量として、また、基本的な訓点資料として中核をなすものである。だが、いうまでもなくこれらの資料は、まず、第一義的には、仏教学の資料であり、また、中国文学・東洋史・儒学の文献である。これらの古典籍のうち訓点の記入のある資料を取り出して集めて訓点資料と称している。したがって、訓点の記入のない古写経や漢籍の類は、基本的に訓点資料としてのあつかいをうけることがない。つまり、現存する古典籍であっても、訓点の有無によって、異なるものとして見ることになる。

研究分野によって異なるものをそこに見ていること、これは、資料の整理・目録の作成において、異なった視点から、異なったデータをとりあつかうことを意味する。現在、文献資料・古典籍についても、その検索メタデータについて時空間情報(GIS)を軸に統合しようという流れがある。このとき、研究分野が異なれば、そこに見る時空間情報も異なるものであるはずである。以下、訓点資料として見た『日本書紀』は、どのような時空間情報のなかにあるか、その構造を分析することにする。

06. 日本書紀について

おそらく一般的な視点から『日本書紀』という文献について記すならば、以下のようなことを記載することになるであろう。

- (1).奈良時代 720(養老 4 年)、舎人親王撰。全 30 巻。正史(六国史)の最初。現存する、最古の歴史書。神代巻(巻 1・2 神話)からはじまり、持統天皇までの事跡を、編年体で記す。
- (2).いくつかの古写本が断片的に残存している(岩崎本・尊経閣本・図書寮本、など)。完本としては、写本では卜部家本(内閣文庫)、刊本では近世の慶長古活字本、寛永・寛文の製版本、などがある。
- (3).現在、一般に使用する活字翻刻・注釈本としては、「国史大系」「日本古典文学大系」「岩波文庫」などがある。

この『日本書紀』については、日本古代史の史料として、まずあつかわれることになる。この視点からは、『日本書紀』に記載してある事柄は、史実か否か、が最重要な論点である。つまり、巻 1・2 の「神代巻」は神話を語ったものとして、除外されるし、また、初代天皇とされる神武天皇もその存在そのものに疑義を投げかけることになる。

また、『日本書紀』という文献がどのようにして成立したかの研究もある。実際の執筆は誰によって行われたのか、その原資料はいかなるものであったのか、中国の史書との関係はどうか、などである。

07. 訓点史料としての『日本書紀』

『日本書紀』は、古代史籍であると同時に、日本語の歴史研究のための、訓点資料でもある。この点に着目すると、歴史学とは異なる学術情報をそこに求めることになる。

- (1).「神代巻」が神話の巻であり、史実ではないとしても、それがことばで記されているかぎり、日本語の資料である。奈良時代以前の日本語と漢文、万葉仮名による日本語表記(主に古代歌謡)は、重要な資料である。
- (2).古写本に訓点が記入されている場合、その訓点は、貴重な日本語研究資料である。このとき、重要なのは、何時、どのような経緯で、その訓点が記入されたのか、ということである。一般に訓点の記入については、次のように分けて考えるのが通常の見解である。
 - [1].その写本自体の書写と同時に、加点された。
 - [2].その写本とは別の写本から、移点された(他の本の訓点を書き写す)。
 - [3].ある写本に対して、異なる別の写本の訓点を、後世になってから移点した(書き加えた)。そして、最大の問題は、訓点の記入に見られる日本語(日本書紀の読み方)は、いったい何時の時代のどのような日本語によったものであるのか、という点である。

08. 『日本書紀』の日本語研究資料としての時空間情報

『日本書紀』の代表的な古写本について見れば、例えば次のような事情にある。

- (1).岩崎本(京都国立博物館蔵) 本文は平安時代の中期の書写(22・24)。それに、平安中期、院政期、室町期(二種)、の三次にわたって加点されている。
- (2).図書寮本(宮内庁書陵部蔵) 永治二年(1142)書写加点(12・13・14・15・16・17・21・22・23・24)、無点(10)、興国七年(1346)書写加点(2)。
- (3).前田家本(尊経閣蔵) 本文は平安後期の書写(11・14・17・20)。それに、院政期に加点(朱点・墨点)される。特に、この写本には、訓点に詳細なアクセント注記があり、日本語アクセント史の重要資料である。

つまり、日本語研究資料としての『日本書紀』は多重構造を有していることが分かる。

- (1).上代日本語(奈良時代以前)の資料としての側面。これは、『日本書紀』の本文(漢文の本文や万葉仮名表記の歌謡など)が資料として利用される。この場合、養老四年(720)のテキストがいかなるものであったが、課題となる。もちろん、この原本は現存するものではない。
- (2).平安時代以降の資料としての側面。これは、『日本書紀』の本文ではなく、そこに記載された訓点を資料としての研究である。この場合、『日本書紀』は上代日本語資料の資料というよりも、その後の日本語(主として平安時代以降)の資料として見ることになる。そして、それぞれに加点されたオリジナルの資料が現存する。
- (3).さらに、本文の書写と加点とが時期を異にする場合がある。あるいは、後世に、新たな訓点を追記する場合もある。つまり、ひとつの写本が、言語資料(訓点)としても、複数の時間情報を持つことがある。

では、このような『日本書紀』の各写本・訓点について、どのような時間属性を定義することが可能であろうか。ここで、性急に答えをもとめようとは思わない。しかし、少なくとも、一義的に定義できるものでないことは確認できるかと思う次第である。これを強引に単純化して「720年・平城京」としてしまうことには、異議を唱えざるをえない。

以上のように記すと、いたずらに議論を錯綜させているかのごとく誤解される懸念もある。だが、あえて言えば、少なくとも過去半世紀以上にわたって、日本語の歴史研究にたずさわる研究者たちは、このような複雑な様相の資料を相手にしてきたこと、そのことは、まぎれもない事実である。この厳然たる研究史をふまえないで、学術資料のデジタル化の推進といわれても、訓点資料をあつかう研究者としては、とまどうばかりであるのが実情である。そして、研究者がその専門の研究につかえないようでは、資料のデジタル・アーカイブは、その価値を発揮しえない。

09. 研究者として何をなすべきか

資料のデジタル・アーカイブは、専門家の使用に耐えるものでなければならない。しかし、その作業(作成・管理運営)そのものは、その方面の専門家にゆだねるべきものと考え。ここで、研究者の役割はどのように位置づけられるであろうか。

- (1).その資料をつかった研究をすすめること(これは、言うまでもないが、まず確認しておきたい)。
- (2).その資料をどのようなものして見ているかを、きちんと説明できること。他の研究分野とどのような関係にあるのか、いわゆる学際的な視点から把握できて、説明できること。

このときのキーになるもののひとつが、これからは、時空間情報(GIS)の視点である。『日本書紀』であれば、歴史学の立場からあつまっているのか、日本語研究の立場からあつまっているのか。日本語研究の場合でも、上代日本語の研究資料として見るのか、訓点資料として見るのか。隣接する専門分野(日本語の歴史研究からすれば、歴史学・書誌学など)に配慮しつつ、専門の研究者として、その説明の責務がある。

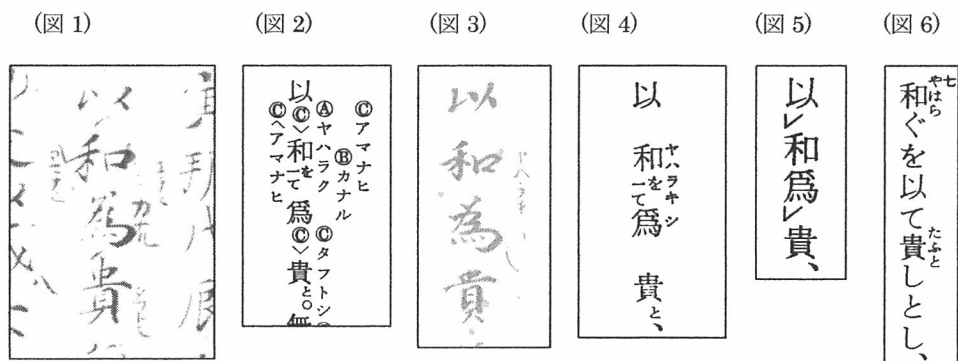
逆に、このことを、具体的な要求として提示するならば、例えば、次のようになる。

- ・平安時代の加点本で、博士家点(ヲコト点の一種)が使用されている、訓点資料を検索したい
- ・聖徳太子「憲法十七条」が実際にどのように訓読されてきたかその典拠を知りたい
- ・「以和為貴」のことばは、東アジア漢字文化圏においてどのような意味をもつのか

このような要求に、こたえてくれるシステムとして、時空間情報(GIS)は、どのように活用可能であろうか。

10. 具体的事例－「憲法十七条」－

訓点資料とその翻刻・読み下し文の事例として、『日本書紀』巻 22(推古紀)から事例をしめす。この箇所は、聖徳太子の「憲法十七条」の冒頭「以和為貴」である。



(1)(2)は、岩崎本(画像と翻刻)、(3)(4)は図書寮本(画像と翻刻)、(5)(6)は岩波文庫の漢文本文と読み下し文、である。岩崎本では、3段階にわたる加点があり、翻刻では(A)(B)(C)で区別している。(A)は平安中期、(B)は院政期、(C)は室町期、である。また、ヲコト点(漢字の隅に記された朱の記号)「を・て」と、仮名による記入「アマナヒ・ヤハラク」を区別する。(3)(4)では、「和」の字の読み方が岩崎本と異なることがわかる(「ヤハラキ」)。(5)(6)では、訓点資料としての情報がまったく振り落とされてしまっている。かろうじて、読み下し文の注(校注者)によって、岩崎本に依拠したことを知ることはできる。しかし、ヲコト点・仮名の区別や具体的な典拠(訓点)について、ここからは読み取れない。

つまり、(5)(6)では、漢文表記・万葉仮名表記の箇所については、翻刻された研究資料として利用可能であっても、日本語研究の訓点資料として、ヲコト点・仮名の資料としては、利用できるものではない。そして、「以和為貴」がどのように読まれてきたかを知ろうと思うとき、訓点資料に依らざるをえない。そして、その訓点の実態は、資料・加点年代によって変遷のあるものであることが理解できよう。訓点資料があることによって、日本書紀がどのような日本語で読まれてきたか、また、その当時の日本語はどのようなものであったかを知ることができるのである。

一方、「以和為貴」が「礼記」「論語」と関係することは、岩波文庫版の注でも指摘されている。これをより追求するには、各種の漢籍 DB や漢訳仏典 DB との連携が必須となる。

岩崎本の加点状況の変化(図 2-1)～(図 2-4)と、ヲコト点(図 7)を示す。このように岩崎本は、(A)～(C)へと、順次加点されたものである。ヲコト点は平安中期(図 2-2)と同時と考えられている。



11. おわりにー多元的な時空間情報のなかでの訓点資料ー

時空間情報(GIS)が、その本来の用途を離れて、人文情報学(Digital-Humanities)において、学術資料の検索・共有・流通のために、動きだそうとしている。だが、人文学研究資料に、これをあてはめようとしたとき、そこには、きわめて多様で錯綜した、多元的な時空間情報を見ることになる。時空間情報は、決して、一義的に決まるものではない。

一方で、現在、我々(人文学研究者)は、次のような状況におかれている。既存の学問の研究領域・専攻・学科などの枠組みが維持できなくなりつつあること。それと並行して、学術資料や研究方法のデジタル化が進行していること。このような流れのなかにあつて、旧来より継承されてきた学知(その専門分野での暗黙の了解事項)の、再検討・再構築が課題となっている。

本発表は、「何もつくってはいない」ものである。しかし、これから「何かをつくっていく」ときの基本的視座を模索するところみである。その「何か」とは、訓点資料のデジタル化である。まずは、訓点資料という、一般にはあまり知られていない資料が、きわめて重要な日本語研究資料として存在すること。そして、それは、東アジア漢字文化圏における、東洋古典籍研究の一部でもあること。仏教学・東洋思想史・歴史学などのデータの相互利用が可能でなければならないこと。このような事情を、情報工学系研究者の方々に知ってもらふこと、ここからスタートしなければならない。

脚注

注1 このような漢文訓読・訓点の記入が、日本独自のものであるかどうかは、訓点語研究者の間でさかんに議論されているテーマである。現在では、日本だけではなく、朝鮮半島をはじめとする、中国周辺の諸地域で、それぞれの言語文化に対応したかたちで、漢文の受容がなされていたであろうことが判明しつつある。

注2 訓点語学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/kuntengo/>

注3 「日本語史」「国語史」と称する本は多数あるが、その内実は、大学で日本文学や日本語を勉強する学生向けのテキストである。これらを除いて、日本語の通史として一般に読めるのは、現在では、次の二つほどにすぎない。

山口仲美、『日本語の歴史』(岩波新書)、岩波書店、2006年

亀井孝(他)編著、『日本語の歴史』(平凡社ライブラリー)全8巻、平凡社、2006ー現在刊行中(初版は1963年に平凡社より刊行)

参考文献・HP

『日本書紀』1ー4(宮内庁図書寮本影印集成)、石塚晴通・石上英一(解説)、八木書店、2006ー2007

『図書寮本 日本書紀 本文篇』、石塚晴通、美季出版社、1980

『図書寮本 日本書紀 研究篇』、石塚晴通、汲古書院、1984

『日本書紀』(尊経閣善本影印集成)、石上英一・月本雅幸(解説)、八木書店、2002

『東洋文庫蔵 岩崎家本 日本書紀』、築島裕・石塚晴通、日本古典文学会、1978

『日本書紀』1ー5(岩波文庫)、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋(校注)、岩波書店、1994ー1995

『訓点語辞典』、吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸(編)、東京堂出版、2001

『日本語学研事典』、飛田良文(他編)、明治書院、2007

『デジタル版点本書目の構想について』、小助川貞次、第95回訓点語学会発表資料、2006

<http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/index.html> 京都国立博物館 収蔵品データベース